

零除算

$0/0=0$ の証明 (可減集合編)

定義: A, B を実数とすると、除算 B/A の演算を、以下で定義する.

$$B / -(|\{A\}| \cdot |A| + a) = 0 \quad (0 \leq a) \quad (A, B, a \in \mathbb{R})$$

において、 $B_0 = B$, $A_j = A$ ($j=0, 1, 2, \dots$)として、可減漸化式 $B_j - A_{j+1} = B_{j+1}$ における A_{j+1} (この A_{j+1} を第 $j+1$ 可減数と呼ぶ) を元とする集合を第 $j+1$ 可減数集合 $\{A_{j+1}\}$ とし、 B_j (この B_j を第 j 被可減数と呼ぶ) が $B_j > B_{j+1} \geq 0$ を満たすとき、 $\{A_{j+1}\} \neq \emptyset$. 満たさないとき、 $\{A_{j+1}\} = \emptyset$ として、全ての可減数集合 $\{A_{j+1}\}$ を要素とする集合を可減集合 $\{A\}$ とする.

ここに、 B は被除数、 A は除数、 $|\{A\}|$ は可減集合 $\{A\}$ の要素数 $|\{A\}|$ であって B/A の商であり、 a は剰余であって、 $|\{A\}|$ を最大化したときにとり得る非負最小実数である.

このとき、次の定理が成り立つ.

定理 1: $0/0=0$ が成り立つ.

証明: 定義 $B / -(|\{A\}| \cdot |A| + a) = 0$ より、 $B=0 \Rightarrow a=0$.

従って、 $0 - (|\{A\}| \cdot |A| + 0) = 0 - |\{A\}| \cdot |A| = 0$.

ここで、 $A=0 \Rightarrow 0 - |\{A\}| \cdot |A| = 0 - |\{A\}| \times 0 = 0$.

さて、 $B=B_0=0 \wedge A=A_j=0$ 故に、可減漸化式 $B_j - A_{j+1} = B_{j+1}$ は $0 - 0 = 0$ であって $B_j > B_{j+1} \geq 0$ は満たさない. よって、可減集合 $\{A\} = \{\{A_1\}, \{A_2\}, \dots, \{A_j\}, \dots\} = \{\emptyset, \emptyset, \dots, \emptyset, \dots\} = \emptyset$ であり、要素数 $|\{A\}| = |\emptyset| = 0$ を得る. 従って、 $A=B=0 \Rightarrow B - (|\{A\}| \cdot |A| + a) = 0 - (0 \times 0 + 0) = 0$. $\therefore 0/0=0$.

$100/0=0$ の証明 (可減集合編)

定理 2: 除算 B/A における $A=0$ の商は 0 で、余りは B となる.

証明: $B > 0$ のとき、定義 $B / -(|\{A\}| \cdot |A| + a) = 0$ より、 $A=0$ ならば、 $B=B_0 > 0 \wedge A=A_j=0$

故に、可減漸化式 $B_j - A_{j+1} = B_{j+1}$ は、

$$B_0 - 0 = B_0 = B_1$$

$$B_1 - 0 = B_1 = B_2$$

...

$$B_j - 0 = B_j = B_{j+1}$$

であって、 $B_j > B_{j+1} \geq 0$ は満たさない.

よって、可減集合 $\{A\} = \{\{A_1\}, \{A_2\}, \dots, \{A_j\}, \dots\} = \{\emptyset, \emptyset, \dots, \emptyset, \dots\} = \emptyset$ であり、要素数 $|\{A\}| = |\emptyset| = 0$ を得る. 従って、

$$|B| = |\{A\}| \cdot |A| + a = |\emptyset| \cdot |0| + a = 0 \times 0 + a = a$$

が成り立つ.

これより、 $B > 0 \Rightarrow a \neq 0$ が成り立つ. ここで、 $A=0 \Rightarrow \text{商}|\{A\}|=0$, 且つ、余り $a=B$ であって、明らかに、 a は $|\{A\}|$ を最大化した際の非負最小数であるから $B \neq 0$ における除算 B/A における $A=0$ の商 $|\{A\}|$ は 0 で、余り a は B となる. 勿論、 $B=0 \Rightarrow a=0$ が成り立つ. \square

ここで、上記定義には、少なくとも A と B の何れか一方が負数となるケースを意図的に外して謂わば、四半平面 (第一象限) のみを考慮した. そこで、これらの様な負数を含む場合の拡張定義と、そ

の効果を下に示す.

拡張定義: A 及び B を負数の実数とするとき, 除算 B/A の演算を, 以下で定義する.

$$\text{商} = \frac{|A| |B|}{A B} |\{A\}| \quad \text{剰余項} = \frac{|B|}{B} a$$

以上で置き換えれば, 結果は以下のようになる.

各ケースにおける商の符号等は,

i. $A = -\alpha < 0 \wedge B = \beta > 0,$

$$\text{商} = \frac{|A| |B|}{A B} |\{A\}| = \frac{|-\alpha| |\beta|}{-\alpha \beta} |\{A\}| = -\frac{\alpha \beta}{\alpha \beta} |\{A\}| = -|\{A\}|$$

ii. $A = \alpha > 0 \wedge B = -\beta < 0,$

$$\text{商} = \frac{|A| |B|}{A B} |\{A\}| = \frac{|\alpha| |-\beta|}{\alpha -\beta} |\{A\}| = -\frac{\alpha \beta}{\alpha \beta} |\{A\}| = -|\{A\}|$$

iii. $A = -\alpha < 0 \wedge B = -\beta < 0,$

$$\text{商} = \frac{|A| |B|}{A B} |\{A\}| = \frac{|-\alpha| |-\beta|}{-\alpha -\beta} |\{A\}| = \frac{\alpha \beta}{\alpha \beta} |\{A\}| = |\{A\}|$$

iv. $A = 0,$

$$\text{商} = \frac{|A| |B|}{A B} |\{A\}| = \frac{|0| |\beta|}{0 \beta} |\{A\}| = 0 \times 1 \times |\{A\}| = 0 \times |\{A\}|$$

v. $B = 0,$

$$\text{商} = \frac{|A| |B|}{A B} |\{A\}| = \frac{|\alpha| |0|}{\alpha 0} |\{A\}| = 1 \times 0 \times |\{A\}| = 0 \times |\{A\}|$$

vi. $A = 0 \wedge B = 0,$

$$\text{商} = \frac{|A| |B|}{A B} |\{A\}| = \frac{|0| |0|}{0 0} |\{A\}| = 0 \times 0 \times |\{A\}| = 0 \times |\{A\}|$$

となる. また, 各ケースにおける剰余項の符号等は,

I. $A = \alpha > 0 \wedge B = \beta > 0$

$$\text{剰余項} = \frac{|B|}{B} a = \frac{|\beta|}{\beta} a = \frac{\beta}{\beta} a = a$$

II. $A = -\alpha < 0 \wedge B = \beta > 0$

$$\text{剰余項} = \frac{|B|}{B} a = \frac{|\beta|}{\beta} a = \frac{\beta}{\beta} a = a$$

III. $A = \alpha > 0 \wedge B = -\beta < 0$

$$\text{剰余項} = \frac{|B|}{B} a = \frac{|-\beta|}{-\beta} a = -\frac{\beta}{\beta} a = -a$$

IV. $A = -\alpha < 0 \wedge B = -\beta < 0$

$$\text{剰余項} = \frac{|B|}{B} a = \frac{|-\beta|}{-\beta} a = -\frac{\beta}{\beta} a = -a$$

V. $A = 0 \wedge B = \pm\beta \neq 0$

$$\text{剰余項} = \frac{|B|}{B} a = \frac{|\pm\beta|}{\pm\beta} a = \pm 1 \times a = \pm a$$

VI. $A \neq 0 \wedge B = 0$

$$\text{剰余項} = \frac{|B|}{B} a = \frac{|0|}{0} a = 0 \times a = 0$$

VII. $A=0 \wedge B=0$

$$\text{剰余項} = \frac{|B|}{B}a = \frac{|0|}{0}a = 0 \times a = 0$$

となる.

補題1 : 除算 B/A において, $A > B = 0$ の場合

定義より,

$B = B_0 = 0 \wedge A = A_j > 0$ であり,

可減漸化式 $B_j - A_{j+1} = B_{j+1}$ は

$$B_0 - A_1 = 0 - A = B_1$$

$$B_1 - A_2 = -A - A = -2A = B_2$$

...

$$B_j - A_{j+1} = -(j+1)A = B_{j+1}$$

であって $B_j > B_{j+1} \geq 0$ は満たさない.

よって, 可減集合 $\{A\} = \{\{A_1\}, \{A_2\}, \dots, \{A_j\}, \dots\} = \{\emptyset, \emptyset, \dots, \emptyset, \dots\} = \emptyset$ であり, 要素数 $|\{A\}| = |\emptyset| = 0$ を得る. 従って,

$$A > B = 0 \text{ のとき, } 0 - (|\{A\}| \cdot |A| + a) = 0 - (|\emptyset| \cdot |A| + a) = 0 - (0 \times |A| + a) = 0 - (0 + a) = 0$$

$$\therefore a = 0.$$

これより, $A > B = 0 \Rightarrow \text{商}|\{A\}| = 0$, 余り $a = 0$ が成り立つ. \square

補題2 : 除算 B/A において, $A > B > 0$ の場合

定義より,

$0 < B = B_0 < A = A_j$ であり,

可減漸化式 $B_j - A_{j+1} = B_{j+1}$ は

$$B_0 - A_1 = 0 - A = B_1$$

$$B_1 - A_2 = -A - A = -2A = B_2$$

...

$$B_j - A_{j+1} = -jA - A = -(j+1)A = B_{j+1}$$

であって $B_j > B_{j+1} \geq 0$ は満たさない.

よって, 可減集合 $\{A\} = \{\{A_1\}, \{A_2\}, \dots, \{A_j\}, \dots\} = \{\emptyset, \emptyset, \dots, \emptyset, \dots\} = \emptyset$ であり, 要素数 $|\{A\}| = |\emptyset| = 0$ を得る. 従って,

$$A > B > 0 \text{ のとき, } B - (|\{A\}| \cdot |A| + a) = B - (|\emptyset| \cdot |A| + a) = B - (0 \times |A| + a) = B - (0 + a) = B - a = 0$$

$$\therefore B = a$$

を得る. これより, $A > B > 0 \Rightarrow \text{商}|\{A\}| = 0$, 余り $a = B$ が成り立つ. \square

補題3 : 除算 B/A において, $B > A = 0$ の場合

定理2 によって証明されている. \square

補題4 : 除算 B/A において, $B > A > 0$ の場合

定義より, 被除数 B は, $B = kA + b$ (ただし, $k \in \mathbb{N}$, $0 \leq b < A$) と表される.

これを用いれば, $B_0 = B = kA + b$ であるから可減漸化式 $B_j - A_{j+1} = B_{j+1}$ は,

$$B_0 - A_1 = (kA + b) - A = \{(k-1)A + b\} = B_1$$

$$B_1 - A_2 = \{(k-1)A + b\} - A = \{(k-2)A + b\} = B_2$$

...

$$B_{k-1} - A_k = (A + b) - A = b = B_k$$

$$B_k - A_{k+1} = b - A = B_{k+1} < 0$$

であって、仮定より明らかに、 $B_0 > B_1 > \dots > B_{k-1} > B_k \geq 0$ が成り立ち、且つ、 $B_k > B_{k+1} \geq 0$ は満たさない。

これより、可減数集合 $\{A_{j+1}\}$ は、

$$\{A_1\} \neq \emptyset \wedge \{A_2\} \neq \emptyset \wedge \dots \wedge \{A_k\} \neq \emptyset \wedge \{A_{k+1}\} = \emptyset \wedge \{A_{k+2}\} = \emptyset \wedge \dots$$

であるから、可減集合 $\{A\}$ は、

$$\{A\} = \{\{A_1\} \neq \emptyset, \{A_2\} \neq \emptyset, \dots, \{A_k\} \neq \emptyset, \{A_{k+1}\} = \emptyset, \{A_{k+2}\} = \emptyset, \dots\}$$

であり、可減集合 $\{A\}$ の要素数 $|\{A\}|$ は明らかに、

$$|\{A\}| = k$$

となる。即ち、除算 B/A における商は、 k となり、仮定に一致する。

この結果を定義に当て嵌めれば、

$$|B| - (|\{A\}| \cdot |A| + a) = B - (kA + a) = (kA + b) - (kA + a) = b - a = 0$$

$$\therefore a = b \quad (0 \leq b < A)$$

が成り立つ。

ここで、 $b=0$ ならば、明らかに B は、 A の整数倍の正実数であって剰り a が 0 であり、 $b>0$ ならば、 B は、 A で割ると剰り a が b となることを意味する。□

補題 5 : 除算 B/A において、 $A=B=0$ の場合

定理 1 によって証明されている。□